

遊園地であそぼう

— 「ぼくとわたしのゆめの遊園地をつくろう」の活動に関わり場を求めて—

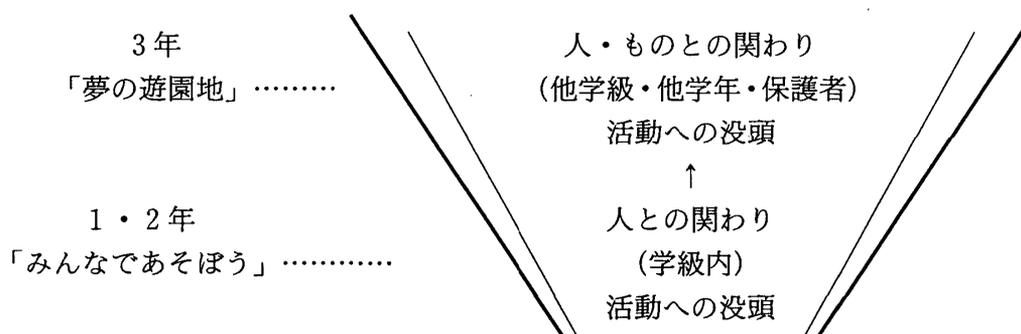
岩 本 和 貴

1 はじめに

人間領域の冒頭文でも述べたように、本校の子どもたちは自分の身近な地域の友だちと一緒に遊んだり、活動したりする機会が少なくなりがちである。多くの友だちと一緒にいることのできる学校でも、条件や時間的・設備的制限から遊び方が限られてきたり、遊びの内容や顔ぶれがマンネリ化してしまうようである。勿論、子どもたちからは、もっと遊びたい、楽しみたいという強い欲求を感じる。そこで低学年を中心に、遊びの活動の中に子どもたちの同士の関わり場を設定し、自然な関わり合いがもてるように考えた。低学年の活動をさらに広げ、友だち以外の人との関わりも考える場として、3年生では「ぼくとわたしのゆめの遊園地」を設定することにした。

2 「ぼくとわたしのゆめの遊園地」の実践から

(1) 低学年の活動から本活動へのつながり



(2) 活動の主題

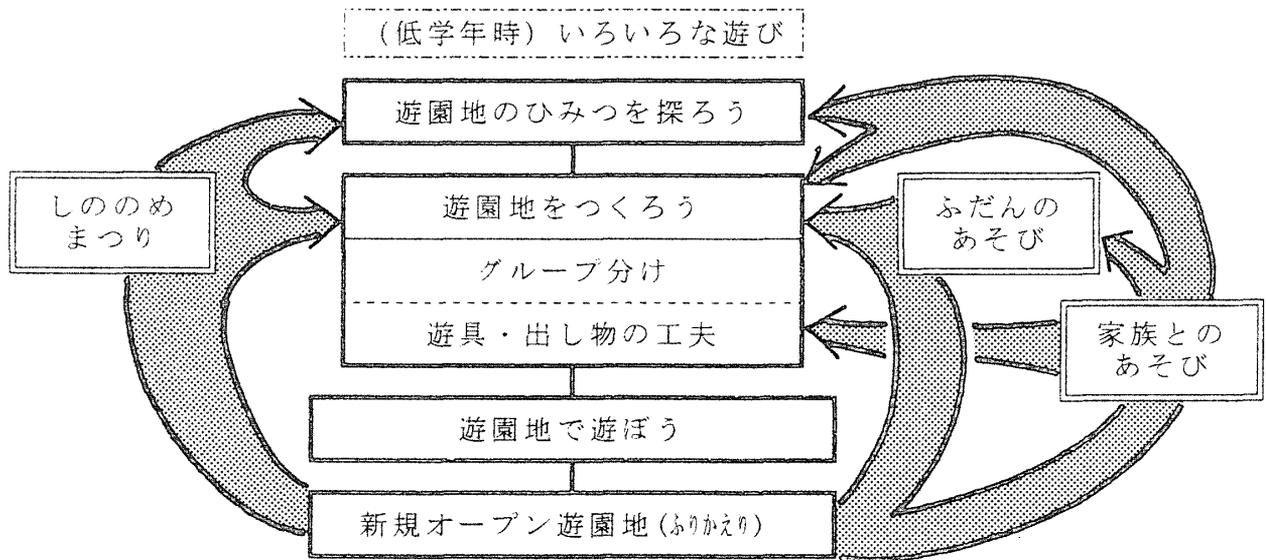
子どもたちにとって「遊び」は大きなふれあいの場のひとつである。低学年のときから、いろいろな「遊び」を通して人間関係を広げている。大人にとっては取るに足らないこと、つまらないと感じることも、多くは「遊び」の中で体験し、その価値観を身につけていく。そういった意味で、「遊び」はひとつの学習(=自ら学ぶ場)であると考えてもよい。また、「遊び」はそれ自体に魅力的な楽しさが感じられる活動である。

遊園地には人々が楽しんで遊び、自分の気持ちを解放することができるような、さまざまなアイデアが盛り込まれている。調べ学習を通じてそのアイデアを学び、学校での楽しい遊園地づくりを工夫することで、自分自身の思いを引き出して思う存分表現できるようにしたい。また、グループでの取り組みの仕方、制作過程や遊園地遊びでの友だちとの関わりに、自分なりの責任をもって、トラブルや試行錯誤もできるだけ子どもたちの力で解決できるような働きかけをしたい。

(3) 活動のねらい

- 自分が工夫した遊具や出し物に、こだわりをもって楽しむことができる。
- 他人を意識した遊具や出し物の工夫にとりくむことができる。
- 友だちとの関わりの中で生まれた問題を、自分たちの力で解決しようとする。

(4) 指導内容と計画 (全15時間)



(5) 活動への具体的な支援

子どもたち同士の関わりや、他人と自分の喜びを意識した活動にするために、次のような支援を行った。

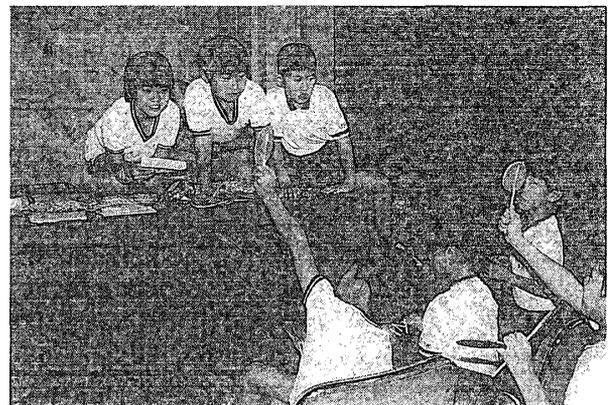
- ① 学校のインターネットや近所の図書館、旅行代理店などの活用について指導して、幅広い資料収集ができるように配慮した。
- ② 広い活動場所を確保することで、活動の創造性を保障した。
- ③ 子ども们的アイデアは、できる限り実現できるように工夫した。
- ④ 細かな指示は控えて、子どもたち自身の考えや行動に責任をもたせるようにした。

主なものを挙げたが、とにかく子どもたちの自然な関わり合いに対して、あまり指導者の作為が働かないようにした。子どもたち同士の意見対立などのトラブルも、具体的な解決法を提示せずに、どうするか見守るよう心がけた(かなりの我慢が必要だった)。

(6) 支援に関わる子どもの変容(取り組み全体を通して)

①については、調べ学習そのものを楽しんでいた。もともと遊園地というテーマそのものが、子どもたちにとって非常に魅力的なものである。自分が行ったことのある遊園地のパンフレットを持ってきたり、あちこちで資料を集めてきたりと、精力的な活動をしていた。インターネットを使った学習にも大変な興味を示し、自分の思いや意図を実現してくれる道具として、大いに活用した。

調べ学習では、遊具やイベントだけに興味が集中しないように、大きなめあてをもって活動できるようにしていた。めあては、遊園地をつくった人や運営している人は、どんな願いや思い、こだわりをもっていいのか探ってみることである。調べ学習が精力的に行われた分、めあてについての考えも深まったようだ。まず「おきゃくさま」を意識しながら、自分の思いを実現しようとする姿勢が見られるようになった。特に、ディズニーランド創業者、ウォルト・ディズニー氏は「便利がよくて人が集まる場所」ではなく、「雨が降らな



「休けい所」

子どものアイデアの中には、到底実現の困難なものもあった。独りよがり、自分の楽しみだけを追求しようとするものもあった。それらを、最初から受け入れない立場をとると、子どもの意欲が殺がれるおそれがある。そのため、子ども自身が考え、納得して「できない」「しないほうがよい」という結論にたどり着くように配慮した。具体的には、子どもと一緒にいろいろなケースを詳しくイメージしながら、実現のための手だてやその過程、いろいろな友だちが遊具で遊ぶ姿について見通しをもつことができるようにした。子どもたちは、遊園地づくりの過程の中で、自分のアイデアを客観的にふりかえり、修正すべきところはどんどん修正することができたと考える。遊園地の開園にあたって、オープニング・セレモニーをしたいというアイデア・計画も、こうした土壌から生まれた（授業の実際について後述）。

出し物・遊具や活動内容・グループを決めるのも、全て子どもたちに一任した。話し合いでは、司会者が進行上間違った判断をしたり、行き詰まって議論が同道巡りになったときだけ援助した。その代わりに、どんな小さな事でも子どもたちが決めたことや、子どもたちの考え・意見をしっかりと全員で確認するようにした。活動が進むにつれて、じっくり考えた言動が多く見られるようになった。自分の意見・考えに責任をもたなければならない、という気持ちが育ったようである。また、友だちの考えをじっくりきいてから、判断しようとする姿勢も見られるようになった。だんだん指導者のところにトラブルの相談に来る回数が減り、自分たちで解決したあと、経過や結果のみを報告に来ることが多くなっていった。

(7) 授業実践の具体例（「遊園地で遊ぼう」より）

① 本時の活動の意図

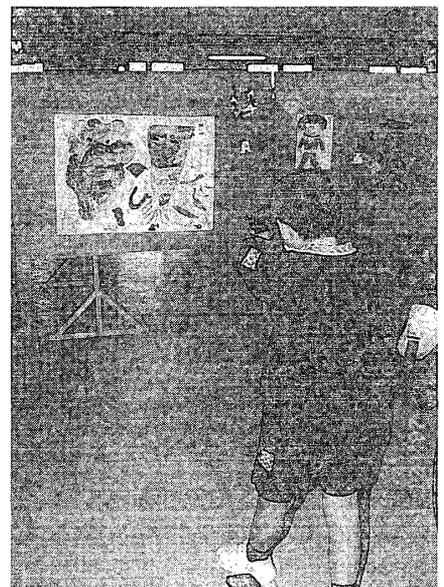
本時は子どもたちの工夫した遊園地がオープンする記念すべき日である。子どもの手による簡単なオープニングセレモニーを設定し、子どもの思いを高め、短い開園期間を楽しもうとする雰囲気を作りたい。また自分の工夫がたくさん友だちに伝わるようなアピールを工夫も用意しておくことで、友だちを「おきゃくさま」として意識できるようにする。自分自身が「おきゃくさま」になることで、遊具や出し物の楽しさを実感し、こだわりをもって遊ぶ場を設定しておく。そうすれば、「おきゃくさまアンケート」で、楽しかったことや物足りなさを率直に表現することができるだろう。それを、次時の遊園地の改善の工夫に生かすことができるようにしたい。



「ミニ列車」



「オープニング・セレモニー」



「しゃげき場」

② ねらい

- 自分たちの工夫した遊園地で楽しんで遊ぶことができる。
- 遊具や出し物の工夫を感じ取り、自分の活動に生かすことができる。
- 自分の工夫した遊具や出し物の楽しさをアピールできる。

③ 評価の観点

- 1 自分が工夫して作った遊具や出し物をどれだけアピールできるか。(こだわり・他人との関わり)
- 2 遊園地での遊びをどれだけ楽しんでいるか。(没頭・満足感)

④ 学習の展開

学 習 活 動	この活動に期待すること	教 師 の 働 き かけ
<p>1 「ゆめの遊園地」オープニング・セレモニーをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○こんなものができたよ。 ○楽しもう。 ○わたしの遊具を楽しんでね。 <p>2 遊具や出し物を楽しんで遊ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・店番を途中で交代する。 ○ここが楽しいよ。 ○こっちはこうだったよ。 ○ここはつまらなかった。 ○もっとこうしたらいいのに。 ○こっちにおいでよ。楽しいよ。 ○いらっしゃい。ここはこんなところが面白いよ。 <p>3 「おきゃくさまアンケート」に書き込みをし、ふりかえる。</p>	<p>活動への意欲</p> <p>夢中で遊ぶ姿 ひとつの遊びへのこだわり。アピール。 他の遊びへの興味・関心</p> <p>人との関わり 情報を交換する姿</p> <p>満足感</p> <p>他者の思いへの気づき</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・参加する他クラスの子どもを、担任とともに誘導する ・雰囲気作り。 ・集中している子どもの気持ちをそらさないように配慮する（見守る）。 ・情報交換が活発になるように、全体の様子を把握し、率先して話題を提供する。 ・交代の時間を知らせる。 ・遊具や出し物の改善につながる、建設的な意見を書く

3 成果と課題

授業の中での子どもの姿は「2 ぼくとわたしのゆめの遊園地の実践から」の「(6) 支援に関わる子どもの変容(取り組み全体を通して)」の項で述べた。この実践を通して学級担任として最も感じる成果は、子どもたちが自分をアピールする気もちが強くなったということである。これまではどちらかというと、自分の思いをみんなの前で言う事を尻込みする子どもが多かったのだが、朝の会・帰りの会・学級会活動などの学級活動の場で自分の意見を言ったり、パフォーマンスをしたがっ

たりする子どもが増えた。教科の授業でも挙手する子どもは決まっていたのだが、この頃からほとんどの子どもの手が挙がるようになってきた。自分の思いを大切にすることと同時に、人の思いを受け入れることを学んだことが、子どもの手を挙げやすくしているのではないかと感じる。

これらの成果は勿論、この実践のみに要因があるものではない。学級経営上の取り組みにもあるだろう。だが、もともと「総合的な学習」を大きな範囲でとらえ、普段の活動の中に「人と人との関わり」の場を意識して取り入れていることを考えると、学級経営そのものが「総合的な学習」の一部分として、この実践とリンクしていると言える。

遊園地づくりに取り組むことはそれ自体、子どもの関心が非常に高い。ひとりひとりが自分の思いに強くこだわり、主張する場面が多くあった。「2 ぼくとわたしのゆめの遊園地の実践から」の「(5) 活動への具体的な支援」の項で述べたような支援によって、子ども自身の手で解決できる場面を保障していった。事後の感想を見ても、遊園地づくりの楽しみと同時に、友だちとの関わりについて述べたものが多く見られた。

自分たちの思いを理解してもらえず、他学年とトラブルも起きた。「お化けやしき」では、順番待ちをせずに会場にはいたり、仕掛けを乱暴な行為によってひどく壊されたりされた。「しゃげき場」では、景品を勝手に持ち去る子どもがいた。いずれも「やられた」という受け身の意識が強く、とにかく抗議にいくと言いつくす子どもが多くいたが、各グループによるふりかえりの中で運営上の反省をしたところ、次のような意見が出た（大意要約）。

「お化けやしき」

- ・待合所で並んでもらったり、待ってもらったりしたときに、待ち方・「お化けやしき」の楽しみ方の説明が、あまりできていなかった。待合所に係が誰もいないことも多かった。
- ・仕掛けの設定が不親切で、「お化けやしき」の仕掛けというよりも進路の邪魔になっていくだけのものが多かった。

「しゃげき場」

- ・景品についての説明が不十分だった。
- ・景品渡しの係がいなかった。
- ・景品の並べ方が雑然としていて、どれをもらえばいいのかわからなかった。

その他の遊具・イベント

- ・「おきゃくさま」へのアピールが十分ではなかった。

抗議は取りやめになり、担任を通して自分たちの思いを伝えてもらえばいい、ということになった。ふりかえりを生かして、遊園地を改善し、「リニューアル・オープン」することができた。以降は、遊園地内での大きなトラブルはなく、子どもたちも満足した様子だった。またこのふりかえりは、自分たちが遊園地で遊ぶときの活動にも大きな影響を与えた。遊具やイベントを運営している友だちの立場に立って、そこにあるもので楽しもうという気持ちでいる子どもがほとんどだった。

「やっている人がかわいそうだから」と言って、「おきゃくさま」の入りの悪そうな遊具やイベントを探して遊ぶ子どもも何人かいた。自分の思いを殺して遊ぶのはどうかな、と思ったが、その子なりに満足して遊んでいる様子であったので見守ることにした。

今年度予定をしていた「総合的な学習・人間領域」の大きな学習活動は、全て終了した。しかし、この活動がひとつのイベントで終わらないように、今後の学級活動の中でつながりをもった学習の一部分としてふりかえることができるように、計画性をもった日常の取り組みを進めた行きたい。